

神は愛なり光なり
《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》
霊界物語 霊主体従
子の巻（第一巻）

第24章 ・ 附記

第二章 《神政開祖と神息統合》〔二四〕

現代語訳

142 神界においては国常立尊が^{いづ}^{みたま}^厳の御魂と明確に現われ、神政^よ^は^子^揚直（開祖）の御魂^み^{たま}^{へん}変性男子を機関（働きの要）とし、^と^よ^く^も^めの^み^こと^キ^リ^ス^ト 豊雲野尊は①神息統合（瑞の御魂・聖師）の御魂を機関とし、地の高天原より三千世界を修理固成するために竜宮館に現れられた。

一、

竜宮界では、三千年の長い間、艱難苦勞を味わった竜神の②乙米姫命が変性男子の血筋から生まれ、二度目の世の^{たて}^{かえ}立替の御神業に参加するため、すべての珍らしい宝を差し出された。この乙米姫命は、竜神の中でも最も欲深い神であって、自分の慾ばかりに心を用いている、きわめて利己主義の強い神であった。それが現代の太平洋の海底深く潜んでいたが、海底の各所から猛烈な噴火が起こるのに逢い、身体は毎日^{さん}^{かん}^{さん}^{ねつ}三寒三熱の苦しみを受けるだけでなく、また猛烈な毒熱を受けて身体を焼かれ、苦しみに耐えかねてこれまでの^{あら}凡ゆる欲望を未練無く捨て、国常立尊の修理固成の大きな事業を悟られ、第一番に^き^{じゆん}帰順《心を改め従がう》された神である。

143 こうして全ての金銀、珠玉、財宝は、種々の部下である竜神によって海底に持ち運ばれ、海底には宝の山が築かれている。これは世界中でもっとも深い海底であるが、ある時期が来て神業の動きだす際に、陸上に現れるのである。要するに《これは》物質的宝であって、神業の補助材料であっても、本当の間にあう宝とはならない。乙米姫命が大神に初めて帰順した時、その宝を持って来られたが、大神はそれ以上の尊く誠の宝を持っておられるので、人間の目には申し分の無いものに見えるものも、余り神界では貴重な宝物とは見なされない。しかし、とに角命よりも大切にしていた全ての宝を投げだした其の改心の真心をほめて、これまでの罪をお赦しになった。この神は改心して財宝を総て棄てて、本当の神の御意志を悟り、^ま^に麻邇以上の宝を探し当て、はじめて崇高な神人の境地に到達し、ここに日の出神の妻神として現れたのである。

二、

つぎに地底のもっとも暗黒い、もつとも汚れたところに押込められておられた大地の^{こん}^{じん}金神、^{きん}^{かつ}^{かね}の^かみ 金勝要神が、国常立尊の出現とともに、天の与えた運命が巡って来て（③天運循環）全ての苦しみから解放され、世界救済のため^や^かた綾部にある竜宮館に現れられた。この^かみ^わか^りめ^ぎの^み^こと 神人は稚姫君命の第五女の神《大本二代教主、すみ》である。144 この金勝要神が大地の中心である地球の全ての権利を得て修理固成の大業をなし遂げ、国常立尊へこれを謹んで差し上げ、国常立大神は地の^{ゆう}^{かい}幽界の政を一手に掌握される^ご御経綸である。

三、

^{みづ}瑞の御魂《出口聖師》は、国常立尊《出口開祖》の御神業の補佐役となり、天地の神命により金勝要神《二代教主 すみ》と並んで、活動なされるといふことに定められた。これは、今から数千年の太古の神界における有様であって、世界に国家が創立されない、世界が一つであった時代のことであった。

そこで^{ばん}こ^{だい}じん^{しん}ほな^がひこ 盤古大神（塩長彦）の系統と、^{だい}じ^{さい}てん^おほく^にひこ 大自在天（大国彦）の系統の神が、大神の経綸を破壊し地の高天原を占領しようと、魔神を集めて一生懸命に押寄せてきた。しかし、地の高天原へ攻め寄せるには、どうしてもヨルダンの

ナ タ サ カ ア
ニ チ シ キ イ
ヌ ツ ⊗ キ ウ
ネ テ セ ケ エ
ノ ト ソ コ オ

のあとのおの舟

大河を渡らなければならない。ヨルダン河には、前述のように、善悪正邪の真相が一目で分かる^こが^ね黄金の大橋がかかっている。それで真先に、その大橋を破壊する必要がおこってきた。ここに盤古大神の系統は^むき^と武蔵彦を先頭に立てて進んできた。これは非常に大きな黒色の大蛇である。つぎに春子姫といふ悪狐の姿をした^{あく}が^かみ 悪神が現はれ、次には足長彦といふ邪鬼が現はれ、そして其の黄金の大橋の破壊に全力を注いだ。

145 それなのに此の大橋は、無限に深い地底より湧きでた橋であるから、容易に破壊出来そうにない。思案に尽きた悪神は、地底における大地の^{きん}^{かつ}^{かね}の^かみ 霊である金勝要神を手に入れる必要を感じてきた。そのためにはいろ

いろと手段をつくし悪だくみを考えて、④瑞の御魂《聖師》を中傷誹謗し（舌の剣）、雑誌や新聞（筆の槍）での攻撃、それだけでなく凡ゆる方法を用意し、思う存分に攻め悩め、しかも、一方には種々姿を変え善神の仮面を被って、巖の御魂《開祖》にたいして詐りを言って訴え、瑞の御魂の排斥運動を試みた。巖の御魂はしばらく考えておられ、つひにその悪神の心中の謀^{はかりごと}を見破られ、直ちにその要求をはねつけられた。その時、足長彦の邪鬼、春子姫の悪狐、武蔵彦の大蛇の正体は神鏡に照されて悪だくみはのこらず曝露し、雲や霞のように海や山を超え一つは北の国へ、一つは西南の国へ、一つは遠く西の国へといちはやく逃げ帰った。

ここに第一戦の第一計画は、見事破られた。悪神は、ただちに第二の計画に移ることとなった。

四、

《附言》^ミ神世開基と^キ神息統合は世界の東北に再現なさる運命にあるのは、太古からの神界の御経緯である。

146 天に王星の顛われ（瑞霊がこの世に出現し）、地上の学者や知識人が驚歎する時こそ、天国の政治が地上に移され、ミロクの世界の政治（仁愛神政）に近づいた時なので、これがいはゆる顛界、幽界、神界の立替立直しの開始である。

ヨハネ《国常立尊、開祖》の御魂は仁愛神政の根本の神であり、また大地を創った（地上創設）⑤太元神であるから、キリスト《聖師》の御魂より勝ることは天地ほどの隔りがある。ヨハネがヨルダン河の上流の野に叫んだ神の声は、ヨハネがこの世に現れ、人としての謙^{へりくだ}った辞^{ことば}であって、決して本当の聖意（お気持）ではない。国常立尊が自分を謙り、他を尊んだ謙讓的天子の聖旨（おぼしめし）をお示しになったまでである。

五、

ヨハネは水によって洗礼を施し、キリストは火によって洗礼を施すという尊いお示しは、月の神の優れた力を發揮して三界を救うと言う意味である。キリストが火によって洗礼を施すというのは、物質文明の最も発達した邪悪な世界を焼き尽くし、改造するという天職である（天から与えられた使命である）。

つまりヨハネは神界、幽界の修理固成の神業には、月の精である水を以てなさり、キリストは世界の改造にあたって、火すなはち霊をもって神業に参加なさるのである。したがってキリストは、反対に下駄を直すだけの価値もないのである。ヨハネは神界、幽界 147 の改造のために尊い御苦勞をなさり、キリストは世界の人心の改造のために身を犠牲にし、万人の罪穢を一身に背負って償^{つぐな}いをなさる天から定められた運命をお持ちになっておられるのである。これは神界において自分が目撃したところの物語である。

そしてヨハネの巖の御魂は、三界を修理固成された時、五六七大神と顕現され、キリストは、五六七神政の神業に奉仕されるのである。このためキリストは世界の精神上の表面にたって活動し、裏面からヨハネはキリストの（聖）体を保護しつつ神の世を招きよせたまうのである。

（大正十・十・二一 旧九・二一 桜井重雄録）

まず、「神界において」とある。そして国常立尊は巖の御魂であり、神政発揚直《神政の時代へ振り興させる》の御魂である変性男子（開祖）を機関とし働かれるのである。また、妻神である豊雲野尊は瑞の御魂であり、キリストの御魂である変性女子（聖師）を機関として働かれるのです。

一、

乙米姫命は竜宮の乙姫様である。「変性男子の血筋から生まれ」とは変性男子は開祖であるからその子供の、二代教主すみの体を借りて出てこられたのである。乙米姫命は「とても利己主義の強い神（欲の深い神）で現代の太平洋の海底深く潜んでいたが、竜神の常として身体は毎日三寒三熱の苦しみと猛烈な毒熱を受けて身体を焼かれ、苦しみに耐えかねてこれまでの凡ゆる欲望を未練無く捨て改心されたのである。そして国常立尊の修理固成の大業を知り、自分がこれまでに集めた宝の全てと奉ったのです。

物質的宝は神業の補助材料にすぎず、本当に間にあう宝ではない。命よりも大切にしていた宝を投げだした其の

改心の真心をほめて、これまでの罪をお赦しになったのである。本当の神の御意志を悟り、^ま麻^に以上^にの宝を探し当て、はじめて崇高な神人の境地に到達し、ここに日の出神の妻神として現れたのです。

二、

大地の金神、金勝要神が、国常立尊の出現とともに地底の最も穢い場所（地獄）での救済を終え綾部の大本に二代教主として生まれられたのである。金勝要神は大地の「力」であり修理固成を成し遂げ国常立尊（大地の「霊」）に差し出されたのである。そして、国常立尊は大地の霊界を治められるのが御経緯です。

三、

「世界に国家が創立されない、世界が一つであった時代のことであった」と大古の話のように見えるが、実は、三段の型より見た時大本創成期の話でもある。

四、

附言である。開祖と聖師がお生まれ（御出現）になった日本は聖地エルサレム（世界の地理）から見ると東北に当たる。キリスト生誕の古事にならって「天に王星の^{あつ}顕われ」はキリストの出現を現しているが、救世主（出口王仁三郎）は世間からは大化物や怪物と言われ、その出現（教え）に知識人のみならず学者をも驚嘆させた。そして今後ますますその偉大さに驚くことでしょう。その時こそが大本の教が広く理解され実践される、世はミロクの世へと入るのです。

ヨハネ即ち大國常立命はこの大地をお造りになった神で、本来のお姿からすればこの世の根本神である。従って、キリストの御魂より勝ることは天地ほどの隔りがある。しかし、ヨハネがヨルダン川でキリストの出現を待っておられたのは、その時のお立場からであって、キリストを尊んで自分を低く見せたまでである。

五、

「ヨハネは水によって洗礼を施し、キリストは火によって洗礼を施すという尊いお示し」は、月の神は体系を司る神であり顕界（顕れた世界）は神皇産霊神の系統の神の御支配である。従って霊系である国常立神は一步下がって陰に回られるのである。即ち、ヨハネは水である体的洗礼を施し、キリストは火である靈的洗礼を施されるのである。

「そしてヨハネの^{いづ}嚴の御魂は、三界を修理固成された時、^{みろくのおおかみ}五六七大神と顕現され、キリストは、五六七神政の神業に奉仕されるのである。このためキリストは世界の精神上の表面にたって活動し、裏面からヨハネはキリストの（聖）体を保護しつつ神の世を招きよせたまうのである。」

序からこの二四章までを確りと勉強すれば七二巻全体を読んだと同じ理解が得られるのである。

用語の解説

① 神息統合

国祖の御神業の輔佐役をされた聖師の御魂。

神息の意味が分からない？

神息は奈良時代、日本刀の刀工の祖と云われた人物で、刀を指すのか？素盞鳴尊の神実は剣であり叢雲の宝剣である。即ち素盞鳴尊による三千世界の統合である。または神息は文字通り神の息（教や命、^{よみがえ}蘇ると云った意味）か？

神息統合にキリストとフリガナが振られていることから救世の働きで有る。

参 考 〔聖書に〕 【インターネット「牧師の書齋」より】

枯れた骨を生き返らせる「神の息吹」

*ところで、聖霊が「息」というシンボルで表されている最も良い聖書箇所はエゼキエル書37章です。そこでは枯れた骨が神の息が吹き入れられることによって生き返るヴィジョンが記されています。「枯れた骨」とは、

ここではイスラエルの民のことです(37:11)。神ならぬ偶像礼拝の罪によってなんの役にも立たなくなってしまった神の民、捨て置くしかない神の民たちのことをここで「枯れた骨(干からびた骨)」と神は言っているのです。しかし、神である主はこれらの「枯れた骨」を神の息吹によってリセットしようとしたのです。

*神は預言者エゼキエルに問いかけます。

「これらの骨は生き返ることができようか」(37:3)。

そして次のように語ることを命じます。

『これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。【主】のことばを聞け。神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが【主】であることを知ろう。』(エゼキエル37:4~6)

*人を生かし、回復させるのは神の「息」としての「ルーアッハ《霊。ヘブライ語》」 \aleph です。

『私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなとどろき。すると、骨と骨とが互いにつながった。私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。そのとき、主は仰せられた。

「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。』

私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中に入った。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。(37:7~10)

*神の霊によって生き返ったイスラエルの民の姿を、別な視点から表現するならば、詩篇119篇にある「幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々」、「主のきとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々」(119:1~2)ということになるかと思います。預言者エレミヤが「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるならわたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる」(29:13~14)と預言していたことが実現したのです。つまり、「心を尽くして主を尋ね求める人々」とされたことの背景には、エゼキエルの言う「見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。」(37:5)という預言の成就があったのです。聖霊である神の息吹なしにイスラエルの民は生き返ることはできず、ましてや、主を心を尽くして尋ね求めることにはならなかったということです。

*神の民は、神の恩寵としての息吹によって生き返ることによって、はじめて自分の足で立つことができました。

「自分の足で立つ」とは、主体的、自発的な生き方をすることを意味します。神のみおしえ(トーラー)に対するかかわりが全く変えられたことを意味します。

*このように人を新しく生かし、人を神に立ち返らせて回復させるのは神の「息吹」としての「ルーアッハ」 \aleph である聖霊です。この方こそ私たちが神とのかかわりを豊かにし、神の愛—長さ、広さ、高さ、深さにおいて人知をはるかに越えた神の愛—を知る(経験する)ための必要不可欠なお方です。【インターネット「牧師の書齋」より】

神息：これはね、神息(しんそく)と申しましてね、奈良時代、日本刀工の祖といわれる神息が、八幡大神の神威を授かり鍛えたという伝説の刀でございます。

神息は、中古剣工の祖といわれ、宇佐神宮の社僧でもあるんですよ。その神息が宇佐の御霊水で鍛えたと伝えられる名刀なんです。和銅・大同の頃は直刀時代でありましたが、姿形から鎌倉期のものと推察されております。刀長は74・6cmでございます。

この刀の出元の「宇佐神宮」、実は多くの謎でつまれましてね…

あの「卑弥呼」の墓の上に建てられたものとされてるんです。他には「二礼、四拍手、一礼」と、出雲大社と同じ拝礼ということ。全国でこの二社のみなんですわね…。

② 乙米姫命 おとよね

竜宮の乙姫様のこと。ご姉妹で姉を豊玉姫、妹を玉依姫（乙米姫）という。

霊界物語では第24巻冠島（オーストラリア）の諏訪湖で玉依姫は竜宮の神宝（五色の玉）を初稚姫や玉能姫、玉治別等に与へ錦の宮に捧持し、教主言依別に渡すよう依頼する。

一般には元来は姉の姫（兄姫（えひめ））に対する妹の姫（弟姫（おとひめ））を指す呼称。《古事記》に〈三野国造の祖、大根王の女、名は兄比売、弟比売の二人の嬢女（おとめ）、其の容姿麗美（かたちうるは）しと聞き定めて〉とある。また末の姫とか、年若く美しい姫の意がある。竜宮に住むという〈乙姫〉や、説経《信徳丸》に出てくる〈乙姫〉のように固有の名となっているものもある。説経《信徳丸》の乙姫は和泉国近木荘の長者の娘だが、癩に冒されて姿を消した信徳丸をたずねて、一転して巡礼姿に身をやつし熊野街道を往還する。【世界大百科事典 第2版】

③ 天運循環

天の与える運命が巡ってくることで、「発端用語の解説⑳ 時節には神も叶はぬぞよ」でも書いたように、化学反応が進むように世界は大きな目的を持って進行しています。悪神に犯された社会も神様の計画通り進み、正しい神々の働く時節がやって来ます。時が巡ってくれば国祖国常立尊が再び世に出て太古と同様の政治が再び行われるのです。

④ 瑞の御魂（巖の御魂）

「発端の用語」の解説⑥番を参照

⑤ 太元神 たいげんしん

天地剖判に先立ち、宇宙の大元霊たいげんれいたる無形無声いつしんの一神ありこれを神典にては天之御中主大あめの み なかぬしのおほかみ神となえ奉る

【3/50 安息日】

附 記

霊界物語について

瑞月 出口王仁三

郎

霊界物語は総計百二十巻で完成する予定になっています。しかしながら是だけ多い著述を全部読み終えなければ、神幽現の三界のいきさが判らないなどと思うのは間違いも甚だしいものです。経の意味を解釈するには、冒頭的一篇の意味を十分に味わって腹に呑み込めば、すべての精神が明らかに理解出来るものです。どんな人間も最初にちらっと見ただけで其の人柄や心が読めるものです。刀剣は鯉口（刀の鞘口）一寸（三寸）の窓さへ開けて見れば、それが名刀か鈍刀かが判り、蛇は三寸（九寸）ほどを見ればモウそれで全体の見当がつくものである。

① 詩経も最初の周南篇に自余（それ以外）の篇があり、周南には『関々（鳥ののどかな声）たる雉鳩（ミサゴ）は河の洲にあり』の最初の語に（詩の精神が）含まれていることが判るやうに、本書もまた第一巻の或る一点を読めば全巻の精神が判るはずである。本書の基本宣伝歌の三章だけで全体の大精神が判る。

教祖の書き残された一万巻の筆先も最初の文章、

『三千世界一度に開く梅の花 良の金神の世になりたぞよ。須弥仙山に腰を懸け世の元の生神 表に現はれて三千世界を守るぞよ。神が表になりて上下運否の無きやうに柵掛ひきならして、世界の神、仏、人民の身魂を改めて弥勒の世に立替立直して天地へお目に掛ける云々』の神示で全体の御経緯や大神の意志が判るものであります。

キリスト教の聖書だとて、

『神世界を創造たまへり。又初めに道あり、道は神なり、神は道と俱にありき、万物これによって造らる』の聖句さへ充分理解すれば聖書の全体の精神が判るのである。

たとえば茶室の中に一輪の朝顔が床柱に掛けてあるのも、見ようによって茶室内だけでなく天地全体が朝顔化するものである。

凡て物は個体を観察して全体を押し量り自分の物に出来るのである。② 華嚴経の一花百億国とは、ごく小さな物の中にも三千世界が包含されているという意義であります。こういう見地に立った時は、いかに分量の多い本書（霊界物語）もその中の一章を理解するための（全文は）注釈に過ぎないのです。

最奥天国の天人になると、智慧証覚が他界の天人に比べて大変に優れているので、他界の天人が数百万言の書を読んでも、まだ十分に理解し得ないようなことでも、簡単な一二言によって良く深遠微妙な大真理を悟るものである。要するにまだ第一天国の天人の領域にその霊性が達していない人のために、神の意志に従いこの様な長編を著述したのであります。

読者の皆さんは幸いに御諒解いただけますよう、茲に一言述べておきます。

霊界物語は初めに百二十巻を予定していたと書かれています。幸い八十一巻八十三冊で終えていただいたので、一生懸命になれば何度か繰り返し読めます。最奥天国に行くような上根の身魂ならばある一章を読んだだけで全てが理解できるのであろうが、我々凡夫は、いい加減な気持ちで読んでいては宝の山に入りながら表に出ている宝だけ取って物の陰に隠れたそれも大きな宝を見逃して帰ることになります。

詩経は、冒頭的一篇を腹に呑み込めば、すべての精神が明らかに理解出来とあり。人間も最初にちらっと見ただけで其の人柄や心が読める。刀剣は鯉口の3センチでそれが名刀か鈍刀かが判り、詩経も周南篇の自余にある『のどかに鳴くミサゴは河の洲にあり』の最初の語で詩の精神が判る。聖書は冒頭の聖句で全体の精神が判る、等冒頭の一章が全体の精神を表わしていると書かれています。神諭も初発の神諭が国祖国常立尊の大精神、大本の

出現の意義と我々がどうしたらミロクの世を迎えられるかが如実に表わされています。

従って、これらの引用からも『序』はこの霊界物語を發表された大精神を表わしていることがはっきりとしています。また、それに続いて基本宣伝歌の重要性が示されています。

用語の解説

① 詩 経

五経の一。中国最古の詩集。孔子の編といわれている。殷の世から春秋時代までの詩三百十一編（内六編は詩題のみ）を国風・雅・頌の三部門に大別。国風には周南・召南・邶・鄘・衛・王・鄭・齊・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳があり、雅には大雅・小雅があり、頌には周頌・魯頌・商頌がある。

② 華嚴経

大乘経典の一。華嚴宗の所依の経典。全世界を毘盧遮那仏の顕現とし、一微塵の中に全世界を映じ、一瞬の中に永遠を含むという一即一切・一切即一の世界を展開している。仏が慈悲の光明で、すべての衆生を受け入れて救いとること》

新屋三右衛門

あとがき

この稿を書き終えて、自分が大本の教を充分理解しえているわけではなく、現時点での理解の程度を確認した様なものである。まだまだ判らないことがあり、五年後十年後に再度試み、信仰の程度を測ってみたい。

参考文献

大本神諭。 出口王仁三郎著作集第一巻。 月鏡、水鏡、玉鏡。 大本のおしえ（天声社）。 インターネット「ウイキペディア」。 その他。

用語の解説総集

〔上〕序～第11章

序	・・・14	⑥ 変性男子の肉体は女体 男霊にして	よ	・・・
① 神素蓋鳴命	・・・	⑤ 神が表に現はれて 善 と悪とを立別ける・・・	40	②② 世に落ちてをりた神 も、世に出て働く時節が 参りたぞよ
5		⑦-1 巖の御魂	・・・	・・・40
② 八岐大蛇	・・・	33		
6		⑦-2 瑞の御魂	・・・33	
③ 叢雲宝剣	・・・	⑧ かの欧州大戦のごと きは	35	③③ 天地剖判の始め・・・
6		18		41
		◆ 一霊四魂	・・・	
④ 天祖	・・・7	18		④④ ためしもなき聖世の過 渡時代に生れ出で、神 業に奉仕することをし 得ば、何の幸か之に如 かむやである
⑤ 五六七の世（五六七神 政）	・・・	⑦ 直日に見直せ 聞き直 せ身の過は宣り直せ	19	⑤⑤ 『神は万物普通の霊にし て、人は天地経綸の司 宰なり
・8		⑧ 本守護神（正守護神、 副 守護神）	・・・	41
⑥ 松の世	・・・	21		⑥⑥ 言霊の幸はう国、言霊 の光り輝く国、言霊の 生かされる国、言霊の 助ける国
8		⑨ 惟神	・・・	・・・41
⑦ 国祖	・・・	25		
8		⑩ 伊都能売の御霊	・・・	
⑧ 苦・集・滅・道	・・・	25		
8		⑬ 五六七神政の成就	・・・	
⑨ 神幽両界	・・・	37		
9		⑭ 立替立直	・・・38	
⑩ 霊主体従 反対語:体主 霊従	・・・	⑮ 主として水洗礼の霊体 両系の改造が三十年 であつて、	・・・	
9		32		
⑪ 国常立命とは	・・・	⑯ 天地経綸の司宰たるべ き奉仕者	・・・	
11		32		
⑫ 初発の神諭	・・・	⑰ 天地の元の先祖の神	・・・	
11		32		
⑬ 主神とは	・・・12	⑱ 「ミタマ」と言う場合 ・・・	39	
		⑳ 霊主体従	・・・	
		32		
		㉑ 天足彦、胞場姫	・・・	
		40		
		㉒ 時節には神も叶はぬぞ	・・・	
		40		
		⑤⑤ 変性男子は神政出現の 予言、警告を發し、千 辛万苦、神示を傳達 し、水をもつて身魂の 洗 礼 を 施 し	・・・33	
		① 私 が	・・・31	
		② 千変万化の波瀾	・・・	
		32		
		③ 竜宮館	・・・	
		32		
		④ 「変性男子」の神系と 「変性女子」の神系と の二大系統	・・・	
		32		
		⑤ 変性男子は神政出現の 予言、警告を發し、千 辛万苦、神示を傳達 し、水をもつて身魂の 洗 礼 を 施 し	・・・33	
		33		
		⑥ 変性男子の肉体は女体 男霊にして	・・・	
		33		
		⑦-1 巖の御魂	・・・	
		33		
		⑦-2 瑞の御魂	・・・33	
		⑧ かの欧州大戦のごと きは	35	
		⑨ 三千世界	・・・	
		36		
		⑩ 変性女子	・・・	
		36		
		⑪ 変性男子	・・・	
		37		
		⑫ 変性女子三十年間の神 業に奉仕して	・・・	
		37		
		⑬ 五六七神政の成就	・・・	
		37		
		⑭ 立替立直	・・・38	
		⑮ 主として水洗礼の霊体 両系の改造が三十年 であつて、	・・・	
		38		
		⑯ 天地経綸の司宰たるべ き奉仕者	・・・	
		38		
		⑰ 天地の元の先祖の神	・・・	
		39		
		⑱ 「ミタマ」と言う場合 ・・・	39	
		⑲ 霊主体従	・・・	
		39		
		⑳ 天足彦、胞場姫	・・・	
		40		
		㉑ 時節には神も叶はぬぞ	・・・	
		40		
		②② 世に落ちてをりた神 も、世に出て働く時節が 参りたぞよ	・・・	
		40		
		③③ 天地剖判の始め	・・・	
		41		
		④④ ためしもなき聖世の過 渡時代に生れ出で、神 業に奉仕することをし 得ば、何の幸か之に如 かむやである	・・・	
		41		
		⑤⑤ 『神は万物普通の霊にし て、人は天地経綸の司 宰なり	・・・	
		41		
		⑥⑥ 言霊の幸はう国、言霊 の光り輝く国、言霊の 生かされる国、言霊の 助ける国	・・・	
		41		
		第1編 幽界の探検		
		第一章 《 霊山修行 》		
		① 開化天皇	・・・	
		44		
		② 三ツ葉躰	・・・	
		44		
		③ 産土	・・・	
		44		
		④ 富士浅間神社	・・・	
		44		
		⑤ 木花咲耶姫命	・・・44	
		44		

第二章《業の意義》

- ① 業は行である・・・
46
- ② 顕幽一致、身魂一本の真理・・・
48
- ③ 可急的・・・
48
- ④ 生成化育、進取発展の事業・・・
48
- ⑤ 惟神・・・
48
- ⑥ 壇特山・・・
49
- ⑦ 三世を達観する・・・
49

第三章《現界の苦行》

- ① 臍下丹・・・
51
- ② 生魂・・・51
- ③ 四恩・・・
52
- ④ 人間において力になってくれる神様がどこにあるだろうか・・・52

第四章《現実的苦行》

- 餓鬼道・・・
54

第五章《霊界の修業》

- 三途の川・・・
56

第六章《八衢の光景》

- ① 八衢・・・59
- ② 牛頭馬頭・・・
59
- ③ 松岡芙蓉仙人・・・
59
- ④ この精霊・・・
59
- ⑤ 幽界・・・
59
- ⑥ 汝は今はじめての来幽なれば、現幽両界のため、実地について研究さるるの要あり・・・59
- ⑦ 三界・・・
60
- ⑧ 天の石笛・・・
60

第七章《幽庁の審判》

- ① 川柳「唐人を入り込みにせぬ…」・・・
64
- ② 「人間界の裁判は常に誤判がある。人間は形の見へぬものには一切駄目である」・・・65
- ③ 神諭に・・・
65
- ④ 顕幽両界のメシヤたるものは、メシヤの実学を習つておかねばならぬ・・・65
- ⑤ 天照大神・・・
65

第八章《女神の出現》

- ① 紫摩黄金・・・
68
- ② 比礼・・・
68
- ③ 參綾・・・
68
- ④ 金勝要神とは・・・

68

- ⑤ 神文・・・
69
- ⑥ 神号・・・
69
- ⑦ 月もなく、鳥もな・・・
69
- ⑧ 冷きった氷の剣で身体を破る・・・
69

第九章《雑草の原野》

- ① 女神・・・
71
- ② 平だの、中だの、木だの・・・
71
- ③ 「西」という色の蒼白い男・・・71
- ④ 復っていた・・・
71

第十一章《大幣の霊験》

- ① 大幣（おおぬさ）・・・
73
- ② 祓戸大神・・・
73

[下] 第12章～第24章

第二篇 幽界より神界へ

第十二章《顕幽一致》

- ① 顕幽一致・・・4
*顕幽という考え方
- ② 「善悪一如」は善も悪も同じということ・・・
8
- ③ 「絶対の善もなければ、絶対の悪もない」・・・
8
- ④ 「根の国、底の国に墜ちて、無限の苦悩を受けるのは、要するに・・・
8
- ⑤ 顕界に生きる者の靈魂が、常に霊界と通じ、霊界からは、常に顕界と交通を保ち

- ・・・8
- ⑥ 娑婆則浄土・・・10
- ⑦ 何ゆゑ神俗、淨穢、正邪、善悪が分るるのであろうか・・・10
- ⑧ 善悪というものは決して一定不変のものではなく、時と処と位置《立場》とによって・・・11
- ⑨ 道の大原・・・11
- ⑩ 人の身魂そのものは本来は神である。従つて宇宙大に活動出来る生まれながらの本能を備えている・・・12

- ⑪ 智、愛、勇、親を開発し・・・
12
- ⑫ 分段生死の肉身・・・
13
- ⑬ 成神観・・・13

第十三章《天使の来迎》

- ① 神人・・・
16
- ② 三穂神社・・・
16
- ③ 天然笛と鎮魂の玉・・・
16
- ④ 天の八衢・・・
17
- ⑤ 罪業・・・

18

- ⑥ 霊体不二である・・・
18

第十四章《天界旅行（一）》

- ① 『一体地獄というものには道は無いのでしょうか』・・・
21
- ② 死有から中有に、中有から生・・・
22
- ③ 追善供養・・・
22
- ④ 国替・・・
22
- ⑤ 天津祝詞・・・

22	④ 蓮華台上 ……39
⑥ 兎兎界 ……	⑤ 祝詞はすべて神明の心を和げ、天地人の調和をきたす結構な神言である ……40
23	⑥ 言霊の幸はう国 ……40
第十五章《天界旅行（二）》	⑦ 烏帽子直垂 ……40
① 小松林 ……27	
② 劫を経た古狸を人間が拝んでいる ……27	
第十六章《天界旅行（三）》	第十八章《霊界の情勢》
① 汝は神界の命令によつてするのであるから ……33	① 霊眼 ……44
② 八頭八尾の守護神が憑依 ……33	② 神劇 ……45
②-1 八頭八尾の大蛇大蛇	③ 天界 ……45
②-2 金毛九尾の悪狐 ……33	④ 表の神諭 ……45
六面八臂の邪鬼 ……34	⑤ 八王大神 ……45
③ 天狗 ……34	⑥ 国魂の神 ……45
④ 畜生道 ……34	⑦ 八王八頭 ……45
⑤ 稻荷下 ……34	⑧ 言向和された ……46
⑥ 霊返し ……34	⑨ 邪鬼 ……46
第十七章《天界旅行（四）》	⑩ 至仁至愛の大神 ……46
① 大祓詞 ……37	⑪ 坤之金神 ……46
② 天地金の神 ……38	⑫ 木花咲耶姫命と彦火々出見命 ……47
③ 盤古大神 ……39	⑬ 大国主命 ……47
	⑭ 弱肉強食の修羅の巷

玉鏡 551「世の大峠と信仰」

神様は人間を神に似せて造り給うた。然るに国祖御隠退以後の世界は、八頭八尾の大蛇や金狐の悪霊、六面八臂の邪鬼のすさびに犯されて、だんだんと神様と離れて悪魔に近い人間になって仕舞つた。人道日に廃れ、世の為め人の為め、国のためなど考ふるものはなく、ひたすらに私利私慾にのみ耽る世の中になって仕舞つた。この儘で進んでいったならば、世界も人類も滅亡するより外は無。これはどうしてもここに一大転換が来て、全人類が廻れ右を断乎として行はなければならぬ事になるのである。悪魔を離れて神様に向はなければならぬ時が来る。かかる転換の期に当つて、人類は可なり重大なる苦しみ艱みの上に立たせらるる事は必然である。日常神を信じ神に従ふ大本の信者の上にも同じ艱みは落ち来るのである。大本信者のみが独りこの苦しみを脱れて、特別の場面に置かるるやうな虫のいい考へをして居たものも往々にして昔はあつたが、さういふ訳には行かぬ。唯

…… [上] 10P	の因縁》
⑮ 御三体の大神 ……47	① 天地経綸の機織の仕組 ……66
第十九章《盲目の神使》	② 大八洲彦命 ……66
① 盲目の男 ……49	③ 和光同塵 ……66
② 実は大神の命令により ……49	④ 大自在天神大国彦 ……66
	⑤ 配所に退去し給うた ……66
第三篇 天地の剖判	第二三章《黄金の大橋》
第二〇章《日月の発生》	① ヨルダン河 ……70
① 稚姫君命 ……53	② 住吉神社 ……70
② 須弥仙山 ……53	③ 返し ……70
③ 自然に左旋運動をはじめる ……54	④ 蓮華台上 ……67
④ 金色の竜体 ……54	⑤ 麻邇の珠 ……71
⑤ 銀色の柱 ……54	⑥ 真澄の珠 ……72
⑥ 大きな剣嘯の厳めしい角の多い一種の竜神 ……54	第二四章《神政開祖と神息統合》
⑦ 伊邪那岐命 ……54	① 神息統合 ……75
① 撞の大神 ……54	② 乙米姫命 ……76
⑨ 素盞鳴大神（月夜見尊、須佐之男大神） ……54	③ 天運循環 ……77
	④ 瑞の御魂（厳の御魂） ……77
第二一章《大地の修理固成》	⑤ 太元神 ……77
■ 大本三大学則 ……59	附記 霊界物語について
① 弱肉強食 [上 10P]	① 詩経 ……79
② 三段の型 ……62	② 華嚴経 ……79
第二二章《国祖御引退	

眞の信仰にあるものは、かかる際神様にお縋りする事の出来る強みをもつて居る。そして常に教へられつつあつた事によつて、先が如何になり行くかの見当をつける事が出来る。この二つの信念の爲め、唯自己をのみ信ずる無神無靈魂者より、遙に容易くこの難関を切りぬける事が出来るのである。

人間の力をのみ頼みて生活しつつある人々が、人力をもつて如何ともする事の出来ない事実に遭遇する時、其艱みや名状すべからざるものがあらう。

人間は造られたるものである。造り主たる神様の御意志にしたがつて行動してさへ居れば、間違ひないのである。来らむとする大峠に際し、信仰無き人々をそぞろに気の毒に思ふ。

「玉 鏡」566 修理固成の仕事 より

大本は今日の既成宗教の様に唯人心の改造だけが仕事ではない。それだけなら容易なことである。生きた誠の宗教といふものはそんなものではない。大本の生命は立替立直しである。而も立替即ち破壊は悪魔がするのだ。大本神の仕事は建設にある。良の金神は修理固成の神である。大本人はその覚悟でどこまでも修理固成の仕事に当らねばならぬ。それには誠と人の力即ち団結力によらねばならぬ。その為には是非とも明るい愛善の心を養ふことが必要である。さうでなくては成就しない。

私見

「赤信号みんなで渡れば怖くない」と云う言葉が一時流行りました。この言葉が流行った頃から、「何でもあり」という風潮が出来はじめ、今は事の善し悪しを考えず、何でもありの時代です。本来世の中のことは、して良い事とそうでない事があるはずですが、しかし現代はそうした事を考えず、面白ければ、お金が儲かればと、善悪の判断を超えておこなわれています。

青少年のゲームでは人を殺すことを何とも思いません。物を盗み人を殺さなければゲームにならないからです。この行為を批判すればたかがゲームの上のこと、現実とゲームの違いは分かっているよと答えるかも知れません。しかし、大本人なら霊界の事を知っているはずですが。想念の世界である霊界では現界での僅かな行為も霊界ではその思いの大小によって大きく変わります。また今の子供は幼児の内から人と戦うことを学びます。幼児番組のポケモンやアンパンマンは悪を懲らすためと言って戦い（戦争）をしますが、決して言向け和すことはありません。

殺人は日常茶飯事です。こう書くと笑われるかもし知れませんが、テレビドラマでは毎日のようにサスペンスと称して殺人が行われ、昔のように一人だけでなく、必ずと云って良いほど連続殺人で何人も死にます。最近では現実のニュース報道でも複数殺人が多くなりました。社会が物質的に豊になり、親は子供に受験への関心は示しても、躰への気苦労を放棄してきました。我慢をするという事がなくなり、金が総てのような風潮があります。若者のファッションでは真新しいズボンをわざわざ破いて穴をお開け新しいファッションとして流行しています。世界にはその日の食べる物にも困る人が居り、子供は4秒に一人死んで行きます。着る物も食べる物にも困る人が居る一方で、それを知ってか知らずか新品の着物を破き、食料の6割を輸入し、4割を捨てている国民が居ます。

人のためより自分のため、3.11の大地震以後、復興のための尊い運動もありますが、一方ではそれを食べ物にしようとする人々も眼にします。

十八才を過ぎると多くの子供が親元を離れ家庭教育が充分にされず社会に出て行き、親と子の絆が薄れていきます。少子化が進むと子供は益々我が儘になっていきます。

しかし、

現代は神様の御神業が進み、隠れていた物が少しずつ表に現れ、支配者のエゴが表に現れてきました。悪い事の隠せない時代となっています。

大本が誕生してから120年が経ちました。我々に、また社会にミロクの世界を迎える準備は出来ているでしょうか。世の中は大きな行き詰まりを感じながら進んでいきます。政治に経済に崩壊を思わせる兆候が現れています。このまま行けば全ての秩序が崩れていく時代が来るような思いで一杯です。

今の世は極度に体主霊従社会です。ミロクの世界は言うまでもなく霊主体従社会です。従って、この社会構造が改められなければミロクの世界が来ません。ミロクの世界の新しい秩序が生まれるためには体主霊従的秩序を一度完全に破壊しなければなりません。倫理も社会構造もありとあらゆる社会秩序を壊した後、新しいミロクの世界への秩序を構築する必要があります。今はその過渡期です。先に書いた「何でもあり」は社会秩序が崩れる前兆でありましょう。人々は様々な取り沙汰をして、天変地異が起こるといいます。物語では国祖御引退の後大洪水があり人々は大方救われました、しかし今度はどうでしょうか、悪の種は残さないと言われていています。このまま緩やかに社会秩序が変わって行くには更に何世紀も必要でしょう。しかし、もう素盞鳴尊は都牟刈太刀を抜いて居られます。人間の力ではどうしようもない所に来ています。大きな物理的変化があつて後、新しい秩序を作ろうとする人々だけが生き残ります。恐らくそうするためには、まず天変地異をもってし、必要最低限度の人間によって再生されるのでしょうか。